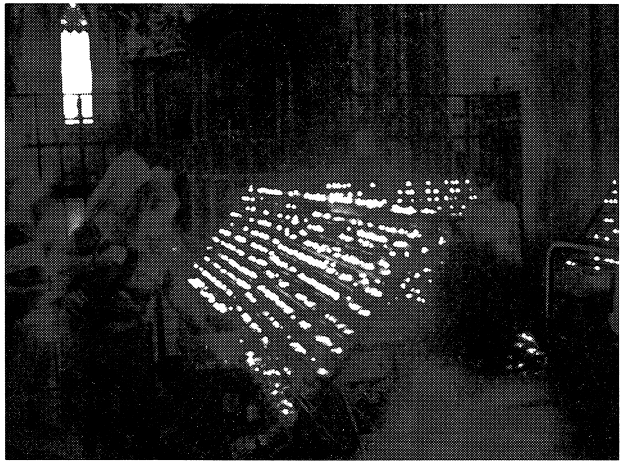
ボスニア＝ヘルツェゴヴィナの宗教事情

望月海慧

はじめに　平成十九年夏に、クロアチアを旅した。実際には、ダルマチア地方の飛び地にある名勝ドブロヴニクの観光を楽しんだだけである。当初は、クロアチアの首都ザグレブ経由で入り、テオ・アンゲロプロスの『ユリシーズの瞳』のように、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの首都サラエボを目指すバス旅行のルートを考えたのだが、十分な日程がとれないこととチケットの手配が遅れたために、ウィーンで時間を取られることになる。しかしながら、その地でもハプスブルク家のバルカン半島への強い影響力を再認識することになった。

そもそもユーゴスラビア地域を意識したのはそれほど最近のことではない。「モザイク国家」とか「ヨーロッパの火薬庫」、あるいはチトー大統領の独裁など大学受験で地理と世界史を選択した受験生にとっては、イスラエルと並んで近現代史の注目すべき地域であった。しかしこの地域をより強く意識したのは、ドイツ滞在中である。休暇の旅行先に東欧を選んだ際にドブロヴニクも選択肢の一つとしたのだが、その地がユーゴスラビア内戦により砲撃され、またサラエボのスナイパー通りの影像をドイツ国営放送のニュースを通して見たこともあり、さらにその後のエミール・クストリッツァの『アンダー・グランド』などのフィルムにも注目していたからである。この紛争の名残を見られるうちに訪れたいと思い、出かけることにした。

ウィーン　オーストリア航空のキャビン・アテンダントは、真っ赤な装いで出迎えてくれた。この色の使い方はとても印象的であった。ウィーンまでの飛行時間も、西ヨーロッパの主要都市に比べ若干短いので、欧州旅行には便利に使える路線かもしれない。到着後シュテファン寺院裏にあるペンションにチェック・インし、急いで閉館間際のベルヴェデーレ宮のオーストリア・ギャラリーを再訪する。もちろんグスターフ・クリムトの『接吻』を子供にみせるためであるが、セセッションにあるベートーベン・フリースを思い出しつつその前を通り過ぎる。世紀末のクリムトの金色の使用法などに宗教的意味を見出すことも可能ではないだろうか。もちろん彫版師である父や日本の琳派の影響がそこにあるのだろうが、身延山久遠寺本堂の加山又造による天井画が金箔に墨を塗ることで金の龍を浮かび上がらせていることを思い出しながら、プラーターに向かう。キャロル・リードの『第三の男』を知らない世代には、観覧車よりも他のアトラク



シュテファン寺院内の灯明供養

ションの方に興味があるようだ。軽食を取り、長かった初日は終了する。

翌日は、ウィーンのカフェでなく、オペラ座横のスターバックスで朝食を取った後、ナッシュ・マルクト脇を通り、シェーンブルン宮殿に向かう。夏の離宮の庭園も楽しんだ後に、街の中心にあるシュテファン寺院に戻り、カタコンベを再訪する。ロンドンのウェストミンスター寺院と対照的に、市井の民の遺骨が街の中心に保管されていることは都市における教会の役割を考える上でも重要である。自分たちの都合により国の宗教までも換えてしまう帝国とは異なり、この旧帝国では教会が市民のものでもあったという印象を与えている。

前回の一七年前のウィーンは、ミュンヘンからの夜行でブタペストに向かい、エステルゴムにあるハンガリー聖教の総本山と、年をまたいだプラハの城内の大聖堂やユダヤ人地区にあるシナゴーグを訪れた東欧における宗教史の調査の際の中継点であったが、今回は南下してドブロヴニクに飛ぶ。機内の座席はB列であるのだが、座ろうとすると座席にやせ型の私のお尻が収まらない。キャビン・アテンダントが秘密兵器を取り出し、座席を広げようとするが、通路の幅がとれなくなり、座席を変更することになる。コントのような話だが、座席移動が幸いし、瑠璃色のアドリア海に浮かぶ真珠のような街を上空から堪能できた。

ドブロヴニク　この地域の山には木々が少なく、地中海性気候の特徴を表しているなどと地理の授業を復習しながら、タクシーにて旧市街近くにあるホテルに向かう。チェック・インの際に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのモスタルに向う手段を尋ねる。当初はバスターミナルから定期バスの利用を考えていたのだが、エクスカーションを紹介され、翌日の予約をした後に、歩いて旧市街に向かう。

ピレ門をくぐり、一三九一年に開業したヨーロッパで

三番目に古いと言われている薬局が付設されているフランシスコ会修道院脇から城壁に登り、旧市街を半周する。一九九一年のニュース影像で見たドブロクニク旧市街への砲撃の被害は、その痕跡をほとんど見ることができなかったが、明らかに新たに修復された建物もあり、逆にそのことがこの地で行われた蛮行を暗示している。丘の上にあるこの街を見下ろすためのロープウェイ駅は破壊されたままである。

全長一九四〇メートルの城壁に囲まれた旧市街の中には、大聖堂、フランシスコ修道院・ドミニコ修道院・旧聖クラレ修道院、救世主教会・聖イグナチオ教会・聖ニコライ教会・聖ヴラホ教会・セルビア教会、シナゴーグなどが狭い城壁の中に収められている。旧市街の東の中心にあるのが大聖堂であり、もともとは一一九二年に英国のリチャード王により創られたのだが、一七世紀にバロック様式で再建されたものである。ここには聖ヴラホ教会とともに港の裏の旧総督邸に隣接しており、広場に

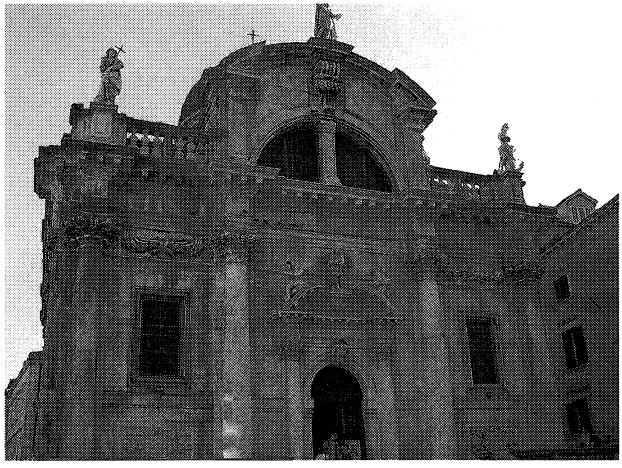
薬局付設のフランシスコ会修道院

は市場も立ち最も人が集まる場所でもある。

北東にあるドミニコ修道院は一二二八年にこの地に入って来たドミニコ派により一五世紀に建てられたものである。このようにこの狭い城壁の中にキリスト教の諸派がそれぞれの教会などを建設してきたことがわかる。

その一方で、セルビア正教会とユダヤ教徒のシナゴーグに関しては、前者はイコン博物館を付設した教会があり、後者も細い路地を入ったところに設置されている。ただし共和国時代にドブロヴニクの終身市民になるためにはカトリックに改宗しなければならなかったことからも、この二つは目立たない場所に設置されており、ガイド・マップの表示がなければ全く気づくことができない狭い路地を入ったところにある。それよりも、このオスマン・トルコの領域にありながら、イスラム教の影響がほとんど見られないことにも注目すべきであろう。

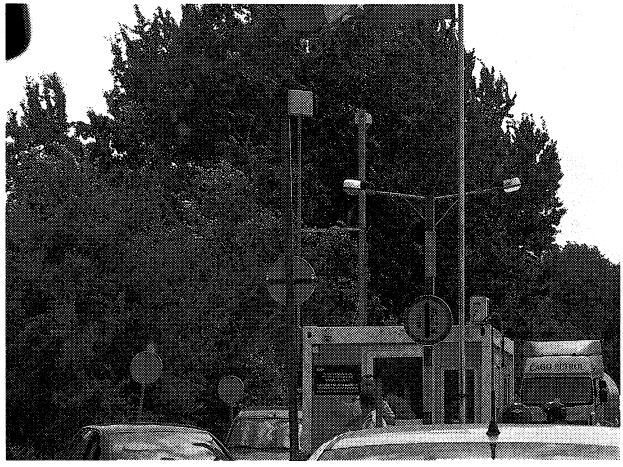
ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ　翌日は、ミニバンで米国



ドブロヴニクの大聖堂

人一家と共にモスタルに向かう。一時間ほど走るとヨーロッパ第二の長さと言われる城壁で知られたストンに至る。さらに牡蠣の養殖場がある海岸沿いを走ると国境を超えてボスニア＝ヘルツェゴヴィナのネウムに入る。ほぼ内陸国のこの国が唯一地中海に面している小さな街である。その地形的理由から貿易港としての機能をもつような街として発展することはなく、この国の唯一の海岸リゾート地となっていた。岬の向こうはどちらもすぐにクロアチアであり、この国境線の由来は十八世紀初頭のヴェネツィア共和国とオスマン帝国の保護国のラグーザ（ドブロヴニク）との紛争にまで遡る。この街を通過するためにのみパスポート・チェックが行われるのだが、クロアチア人が主体のこの小さな街を内陸国のボスニア＝ヘルツェゴヴィナが死守したい意味も十分に伝わってくる。

再びクロアチアに入り、海岸線から内陸に入ってネレトヴァ川を遡ると、渋滞につかまる。そこはボスニア＝



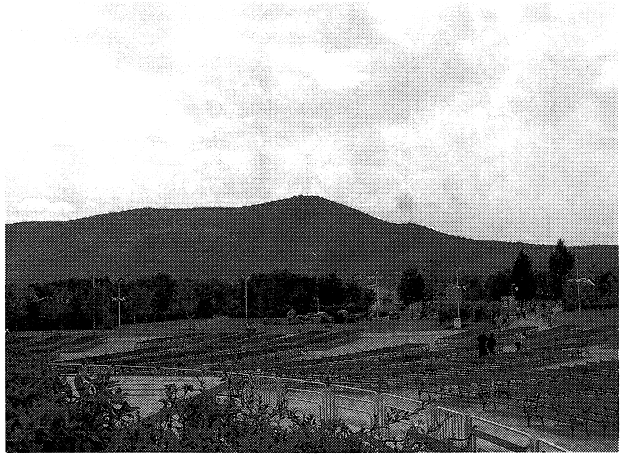
国境の検問所

ヘルツェゴヴィナとの国境である。ごく普通の田舎道なのだが、自家用車を一台ずつチェックしているのか、長い車列が続いている。自由な往来ができるようになるのには、もう少し時間が必要になりそうである。

国境を越えたボスニア＝ヘルツェゴヴィナに入ったところにある小さな街には、いたるところにクロアチアの国旗が掲げてあった。これは他民族国家の中において自らの民族的アイデンティティーを意味するものであろうが、民族のモザイクを実感するものでもある。このことは、暫く走って辿り着くメジュゴリエでは宗教さえもその手段として利用されているような印象を導き出すことになる。今回の調査旅行では全くのノーマークであったのだが、この小さな街が宗教的に最も重要な聖地であることを知る。

メジュゴリエ　モスタルの南西二五キロに位置するメジュゴリエはスラブ語で二つの山の間の地域を意味し、その地域の住民は五〇〇〇人程の小さな町である。クロアチア人が居住するこの村が最初に歴史に名を残すのは一五九九年であり、現在のキリスト教区が築かれたのは一八九二年とされており、宗教的にそれほど古い歴史をもつ地域ではない。この小さな村がどのように聖地に作り上げられたのかについて、観光パンフレットに記されている内容をまとめてみる。

この地が重要な意味をもつようになるのは、一九八一年の六月二四日夕刻のある出来事による。六名の少年が丘の上で子供を腕に抱えた女性を見たことに始まる。翌二五日の同刻にそのうちの四名が引き寄せられるように同じ場所に行き、聖母マリアと気づいた。さらに二人が加わり、彼らは聖母マリアを祈り、話をした。その日以降、彼らは幻影を見るようになった。三日目の二六日に、聖母マリアは「平和、平和、平和、平和だけである。平和が神と人の間、そして人々の間に君臨しなければならない」と平和を呼びかけた。このメッセージに魅了され



聖母マリア出現の丘

て、最初に教区民が、そして他の村、さらに世界中の人々が集まり、祈るようになった。

村の少年たちがある女性に出会ったあるいは幻影を見たというだけの話であるが、これが神話に発展するまでにはいくつかのステップ・アップが必要となる。この女性が実在したのかどうかは明らかではないが、まずその不思議な出会いがある。続いてこの不思議な出会いから、少年らにより彼女が聖者マリアと認識される。この不思議な出会いが繰返され、女性があるメッセージを発信し、彼らが深い感銘を受ける。この体験が宗教的なものと認識され、他者に伝承される。この伝承は同じ信仰を持つ者たちに広がって行き、その地が聖地と設定される。もちろん、これらのすべてが現実の出来事である必要もなく、ある目的のためにこれらが意味付けられるのである。このような話は、日蓮聖人の七面天女との出会いを伝えるものと同種の物語である。ただし大きく異なるのは、このような話が現代において形成されていることである。

それ故に聖地形成の過程を考察する上で、とても重要な研究サンプルになりうる物語である。

残念ながら筆者は宗教的逸話が形成される過程についてこれまで研究をしておらず、全くの個人的印象でしかないが、この物語は最初から結論が決められた上で作られたもののように感じてしまう。それ故に聖地伝承がいかに形成されたのかを考えるよりも、何故この地に聖地が必要とされたのかを考える方が意味あることに思われる。もちろん一九八一年のユーゴスラビア統治下、その後の内戦、そして現在のこの地のもつ意味合いは異なるものであろうが、聖母マリアのメッセージが宗教的ものではなく、平和を訴えるものであることも、その神話を形成する意図はある意味をもつものである。すなわち、その主従関係は明らかではないが、この地にキリスト教に基づく平和の確立を必要とする者がいたということである。そのための手段として聖地化が利用されたのであろう。

これ以上は、筆者が研究すべき内容でもないので、簡単な報告のみをしておく。街の中心にある教会前の通りに入って行くと、渋滞に出くわす。片田舎の小さな街には見るべきものはこの教会しかないのだが、そこに多くの巡礼者が集まっている。教会裏の駐車場に車をとめると、そこには広大な野外集会場が設置されている。教会の正面に立つと、背後には少年たちがマリアに出会ったとされる丘の上の十字架が遠くに見える。筆者には聖地を生み出すような崇高なイメージを全く感じさせないところであるが、この極普通の土地までも聖地に作り上げてしまうような宗教的力が背後にあると思われる別の意図を感じてしまう。教会の中ではミサが行われており、それは明らかに異国からこの地を訪れた信者らであった。そのことは、旧ユーゴスラビアにおける地域的事情により聖地として作り上げられたこの地が、次なる段階に発展していることを意味しているように思える。

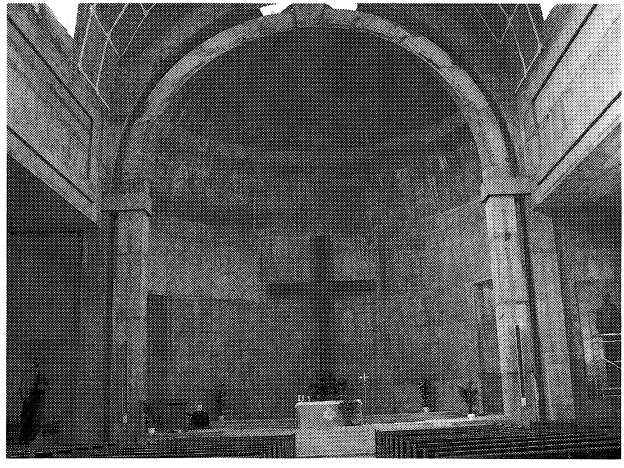
すなわち、聖地の観光地化の段階である。もちろん教

土産物店に並ぶマリア像

会の前には土産物店が並んでおり、マリア像関係のグッズが陳列されている。このことはさらなる悲劇を導いたようである。この地が観光で賑わうようになると、新たなる利権をめぐる争いが生じるようになった。クロアチア戦争により観光客が減少している最中に、セルビア人とクロアチア人の間の客取りの争いが、民族的争いにより相乗作用を受け、この小さな村においてわずか一年で一四〇名が殺害されるなどの残虐な事件が報告されている。おそらくこの地の平和を訴えるために宗教が利用されたという面もあったのであろうが、しばらくするとそれが新たな紛争を引き起こす原因にもなっているのである。聖地エルサレムの場合も、これと大差ないように感じてしまう。現在のこの地は、そのような悲劇を感じさせないような観光巡礼地となっている。ともあれ、この地が「観光宗教学」のような研究領域の重要な研究対象になる地であることは明らかである。

モスタル　実は、今回の旅行の目的地は、この小さな街にある一五六六年に建築された石橋スタリ・モストであった。それほど川幅のないネレトヴァ川をはさんで東側はイスラム教に改宗した南スラブ人の末裔であるボシュニャック人、西側はクロアチア人の居住区と分けられている。一九九二年のボスニア＝ヘルツェゴヴィナの独立宣言によりヨーゴスラビア連邦軍やセルビア人から攻撃を受けたこの地は、その後この対岸に居住する民族どうしの戦闘に発展し、これらの二つの地区を結ぶ石橋は一九九三年の内戦により破壊された。しかしながらユネスコの強力により橋は二〇〇四年に復元され、旧市街と古橋地区は翌年に世界文化遺産として登録されている。

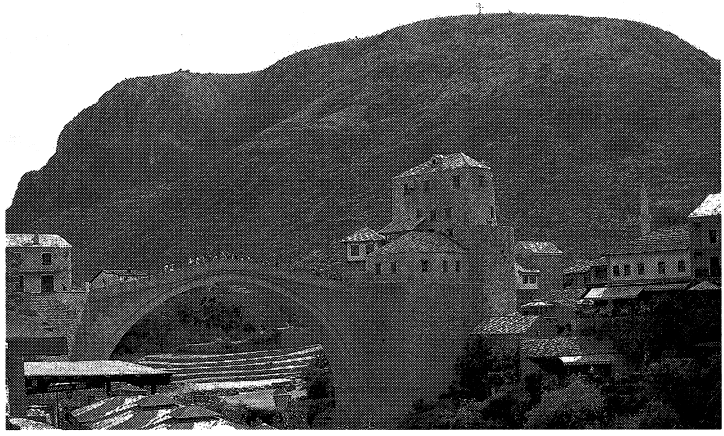
メジュゴリエからほどなく走り、丘を下ってヘリコプターの軍事工場の脇を過ぎるとモスタル市街に入って行く。クロアチア系居住区にはコンクリートにより新築された無機質のフランシスコ教会が再建されている。しかし安藤忠雄によるコンクリート教会のようなポスト・モ



コンクリート建築のフランシスコ教会

ダニズムは感じられず、街を見下ろす尖塔が特徴のこの教会をいち早く再建した背景には、やはり宗教的対抗意識がそこにあるように感じてしまう。ドームが都市の中心になっているドイツの都市のように、クロアチア＝カトリック教徒たちがここを街の中心にしたいという意志も感じられる。彼らは街を見下ろす南の山の頂上に巨大な十字架も建てており、街を掌握したことを示しているとも言われている。しかし通りの向こうには、シナゴーグの跡があり、対岸のイスラム地区の西にはセルビア教会もあり、この国の宗教と民族のモザイク状態がそのまま下部組織の小さな街の中にまで存在していることがわかる。

そのようなことを考えながら、スタリ・モストを眺めながらボスニア＝ヘルツェゴヴィナ料理の昼食をとる。この一番のロケーションにレストランが集中しており、橋からネレトヴァ川に飛び込む者たちを眺める。もちろん飛び込む前に、相棒が小銭を集めているのである。ス



橋を見下ろす丘の上の十字架

タリ・モストは明らかに新築の橋であり、そこは土産物屋が並び、この小さな町が観光産業により再生を図っていることが感じられる。

橋を渡った先のクユンドジルクと呼ばれるイスラム地区の旧市街は明らかに対岸とは異なる街並であり、この町の複雑な成り立ちを表している。この地区の中心は、それほど大きくはないカラジョズ・ベグ・モスクであり、さらに奥には石橋からもそのドームとミナレットを眺めることができるコスキ・メフド・パシャ・モスクがある。

「トルコの家」と呼ばれるオスマン朝の伝統家屋を見学し、通りを少し外れると、そこは砲弾により朽ちたビルがそのまま残されており、公園は墓碑で一杯である。通りを走る市営バスには日本政府が行ってきた公共運送力復旧のための無償資金協力を示す「日本国民から」と表記されている。今回のサラエボへの道はここで断たれるのだが、敗戦後の日本を体験していない筆者には、この国の戦後を実感することができた。

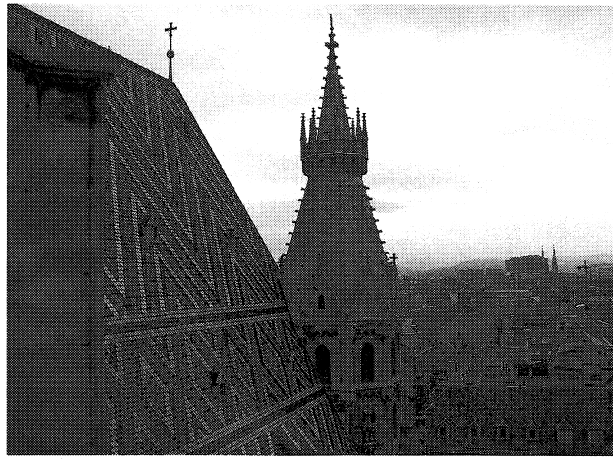
砲弾の跡が残る建物

墓碑が並ぶ公園

再びウィーンへ　翌日は、ドブロヴニクの旧市街を再び訪れた後、夕方のクロアチア航空の便でウィーンに戻る。国立オペラ座で観劇することもなく、向かいでザッハー・トルテを購入してペンションに戻る。

最終日は、早朝よりシュテファン寺院に行き、北塔に登る。今回の旅で、すでに三度もこの教会に足を運んでいることを考えると、この都市がこの教会をランドマークとして設計されていたことがわかる。リンクの中心は王宮ではなく、シュテファン寺院である。日本の門前町において聖なる寺院は奥に鎮座することで俗界と隔てられていることとは異なり、都市の中央に寺院が置かれていることは、一般都民が容易にそこを訪れることを可能にしている。このようにウィーンのシンボリックなものとしてこの寺院が存在していることは、ウィーンという都市がハプスブルク家の都であるだけでなく、ウィーン市民のための宗教都市でもあるような印象が生じる。

同じくリンクの中心にあるハプスブルク家の王宮に向



シュテファン寺院北塔に登る

かう。以前とは大きく異なり、皇妃エリザベートをメインにしたシシィ博物館が設置されていた。博物館も明確な主張をもって運営すべきであることを学んだ。続いて、美術史博物館に向かう。もちろんかつての美術の教科書に載っていたブリューゲルを子供にみせるためである。

まとめ　今回のウィーンで訪れた場所は、すべて再訪である。前回は十分な時間がとれたので、オットー・ヴァーグナやアドルフ・ロースによるウィーンの建築も楽しむことができたが、大阪のゴミ焼却所でも話題のフンダートヴァッサーのものを見落としている。そして何よりも、ウィーン大学には世界的なインド学・チベット学・仏教学の研究所があり、知人がいるにもかかわらず、立ち寄ってこなかったことが残念である。

そして何よりも、今回の旅の目的は宗教と民族のモザイク地域の現状を見ることであった。特に前者に関しては、元は同じところから派生したものであるにもかかわ

らず、それが現在に至るまで多くの暴力的行為を引き起こしている現状を確認できた。一方で、東アジアの宗教の現状はどうであろう。そこでは、仏教の諸宗派共存しており、神道などの異宗教と暴力的紛争を生みだすよりも、むしろシンクレティシズムにより融合したりもしている。もちろん原理主義的正統性を主張するのならば、前者の方が本来宗教的スタイルであろうが、それは軋轢を産出し続けるだけである。他方で、後者のスタイルはその宗教独自の正統性を骨抜きにしているだけでもある。どちらのスタイルが正しいのかという断定は不可能であるが、少なくとの前者では本来意図していないところで多くの犠牲が生じていることを考えると、そこでは東アジア的な他宗派の共生というようなシステムの宗教的な意味を検討する余地は十分にあるように思える。

参考文献

天城桜路『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ／セルビア・モンテネグロ　初級編』東洋出版
柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』一九九六年、岩波書店
柴宜弘『バルカンの民族主義』一九九六年、山川出版社
柴宜弘『新版世界各国史一八　バルカン史』一九九八年、山川出版社
田中一生「巡礼地―オフリドとメジュゴーリエ」柴宜弘編著『バルカンを知るための65章』明石書店、一二一―一二五頁
山下晋司『バリ　観光人類学のレッスン』一九九九年、東京大学出版会
山下晋司『観光文化学』二〇〇七年、新曜社
四方田犬彦『見ることの塩　パレスチナ・セルビア紀行』二〇〇五年、作品社
四方田犬彦『驢馬とスープ』二〇〇七年、ポプラ社